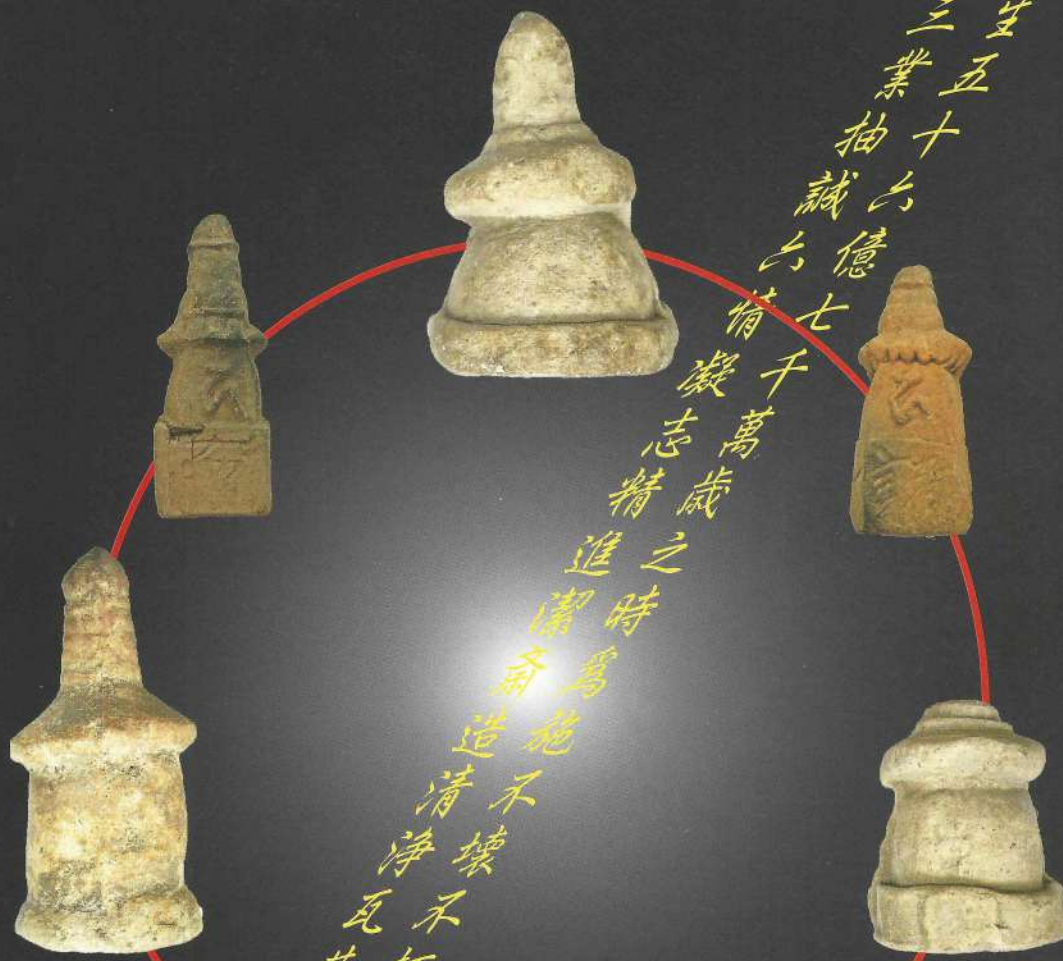
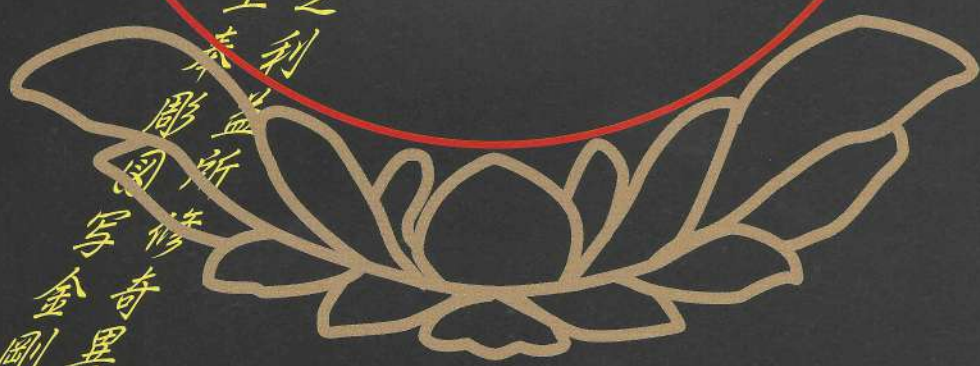


# 泥塔と瓦経

慈氏  
善根也  
三生  
下五  
業十  
抽六  
誠億  
六七  
情千



凝志  
萬歲  
精進  
之時  
為造  
不壞  
清淨  
瓦不  
朽之  
利奉  
彫所  
寫奇  
異剛  
界妙  
急界



其利  
奉彫  
寫奇  
異剛  
界妙  
急界

## ごあいさつ

第8回特別展として「泥塔と瓦経」を開催します。立正大学は仏教系大学として、天正8(1580)年に創設された日蓮宗の僧侶養成機関である「飯高檀林」を起源としており、関東最古の伝統を誇っております。このため考古学教育・研究も、仏教考古学を一つの重要な特徴として推進してきております。立正大学博物館には長い伝統を反映して仏教遺物も所蔵しており、過去の博物館展示では、仏教信仰に基づいて中世に創出された板石を用いた供養塔婆である「板碑」、仏教信仰に則った埋葬儀礼に使用された「骨蔵器」をとり上げてきました。

今回とり上げた泥塔は、泥土を型抜きにして塔形に成形し、これを焼成したものです。また瓦経は、方形あるいは長方形の平坦な表面の粘土板に経典を書写して焼成したものです。ともに仏教信仰に従って土をもとにして造形された作善業であり、様々な願いを込めて製作されています。

泥塔は高さ10cmほどの小形なものです。立体的に造形したものと、扁平な板状の2種類が知られています。一般的に立体的な泥塔が古く奈良・平安時代に盛行し、中世以降には扁平な泥塔が作られています。立体的な泥塔の底部には小さい孔を明け、経典を印した紙片を入れて奉納する例も知られています。この種の泥塔の製作は奈良時代頃から始まり、追善供養、息災延命・病氣平癒などの現世利益を願って作られたと考えられます。

瓦経は、釈尊の正しい教えが行われなくなる末法の世に入ると信じられた永承7(1052)年以後に、経典を保存するために始まった埋経に伴って不朽の経典として創案されたものです。

埋経は、末法思想・浄土教の流行にともない、釈尊入滅の56億7000万年後に、末法の世の衆生を救済するために出現する弥勒菩薩に備えるために始まったものです。このために、様々な品物を副えて書写した経典を埋納した経塚の造営が開始されました。多くは紙に経典を書写した紙本経を埋納していますが、近畿地方から九州地方にかけての西日本では、不朽の材料である粘土板に経典を書写した瓦経がつくられています。

今回の特別展では、この泥塔と瓦経の2種類の仏教遺物を取り上げ、これらに込められた願いがどのようなものであったのかを考えてみたいと思います。

平成25年11月 館長 池上 悟

## 目次

### ごあいさつ

### 目次・凡例

1. 泥塔…………… 1  
大和東大福寺採集品ほか(立正大学博物館所蔵)  
／伯耆竹内経塚出土品(立正大学博物館寄託品・足立コレクション)
2. 瓦経…………… 12  
飯盛山瓦経(立正大学博物館所蔵)／極楽寺瓦経(池上本門寺靈宝殿所蔵)／伊勢小町塚瓦経(池上本門寺靈宝殿)／伯耆大日寺瓦経(足立コレクション)／伝・大和橋寺出土瓦経(立正大学博物館所蔵)

## 凡例

1. 本図録は、第8回特別展「泥塔と瓦経」の展示図録として作製した。
2. 本図録の作製は、館長池上悟の編集方針に従って神林幸太郎(大学院修士課程)が担当し、阿部常樹(当館学芸員)、足立佳代・吉田奈央(大学院修士課程)が助力した。
3. 本特別展開催にあたり、以下の方々・機関にご協力を賜りました。  
安藤昌就・内川隆志・内田勇樹・加藤元康・本間岳人・眞田廣幸・森下哲哉・根鈴輝雄・吉田恵二・池上本門寺靈宝殿・國學院大学博物館・鳥取県倉吉市博物館・鳥取県米子市立山陰歴史館(敬称略)
4. 本図録に用いた挿図の出典及び引用・参考した文献は巻末に掲げた。

# 1. 泥塔

泥塔とは、泥土を型抜きにして成形して高さ10 cmほどの塔形に固めたもので、土塔とも呼ばれます。泥塔は奈良時代頃から製作され始め、江戸時代まで続けられました。時代とともに形態は変化しており、古代では立体的な造形であり、中世以降は扁平形の泥塔が主体をなしています。

立体的な泥塔では、底部に小さい孔を削られる例もあり、孔には経文や偈文印した紙片が納められます。形態は円塔形、段塔形、五輪塔形、宝篋印塔形、宝塔形、層塔形、相輪形などがあります。

宝塔形の泥塔は、全国で25箇所以上の出土例が知られており、特に宮城県多賀城廃寺からは2,683個もの泥塔が確認されています。その他に山梨県権現堂遺跡、熊本県つづの山遺跡などの遺跡から大量の宝塔形の泥塔が確認されています。

泥塔は仏教信仰に従って供養が実修された場所から出土しますが、山梨県権現堂遺跡では全国唯一例の泥塔を製作した焼成遺構も確認されており、泥塔の製作過程について知ることができます。

奈良県からは、北葛城郡広陵町の東大福寺遺跡のほかに、同遺跡から東へ約3km行った磯城郡田原本町宮古付近でも多量の泥塔の出土が確認されています。これらの遺跡から出土する泥塔は全国各地に散逸して所蔵されており、奈良時代頃の代表的な資料と位置づけられています。

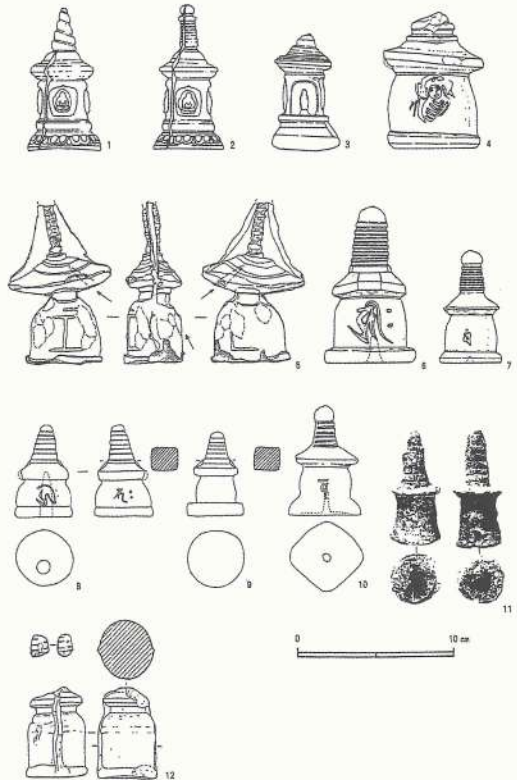
立正大学博物館所蔵の泥塔資料もこれらの遺跡から出土したものであり、國學院大學資料館で所蔵する「服部和彦コレクション」には類似した泥塔資料が15点含まれています。

中世を代表する扁平形泥塔の代表は、伯耆竹内経塚から出土したものです。立正大学博物館に寄託されている12点の泥塔資料も、この遺跡からの出土です。高さ5~7 cm、厚さ1 cmほどの大きさであり、宝塔形と宝篋印塔形が知ら

れています。塔身には地藏菩薩の梵字種子である「カ」を表わし、基礎には文字を一字づつ刻んでいます。泥塔に刻まれた文字は法華経の経文であることが確認され、7万以上の個体が奉納されたものと想定され、全国各地に散逸して所蔵されています。

仏教信仰に従った泥塔を含む小塔供養については、日野一郎氏により考究されています。文献史料によって宝亀元亀(770)年から文明16(1484)年に至る61例を検討して、泥塔を含む小塔供養の変遷が確認されています。

最古の例は称徳天皇の発願により、恵美押勝の乱(764年)後に、戦死した将兵の菩提を弔い鎮護国家を祈念して6年の歳月をかけて宝亀元亀(770)年に完成した、4寸5分の大きさの百万木塔の製作です。



(1) 立体形泥塔集成図

泥塔の初現は、尊意などにより天慶元(938)年に天皇の長久を祈願して実修された泥塔1万をもってする供養であり、最新の事例は応仁元(1467)年に禅定院で行われた供養です。

文献史料にうかがわれる小塔供養は、日野一郎氏の検討により王侯貴族による息災延命、除穢、病氣平癒、安産祈願などの現世利益を目的としたものが確認できます。

宝塔形泥塔の製作状況は、山梨県権現堂遺跡出土品から復元・検討されています。権現堂遺跡から出土の泥塔は11世紀代の所産と考えられるものであり、宝形の造形を直模した基礎・

塔身・笠・相輪からなるものです。塔身の上部には笠との接続として首部が表わされており、相輪の両側には先端部から垂下した鎖を表現して相輪全体で三角形を呈しています。塔身の表面には扉形が表現されていますが、型合わせの結果として扁平な断面となっています。泥塔の製作は、宝塔形を彫刻した凹型の木型を2枚合わせた内部に粘土を充填して成形し、型から取り出して焼成して完成させたものと復元されています。



(2) 泥塔出土遺跡分布図

## 大和東大福寺採集泥塔ほか（立正大学博物館所蔵）

立正大学博物館所蔵の5点の泥塔は、すべて宝塔形の資料です。このうちの4点が奈良県北葛城郡広陵町の東大福寺遺跡で採集されたものであり、残り1点は出土地不明です。これらは、矢追隆家氏により立正大学考古学研究室に寄贈されたもので、『銅鐸』創刊号（立正大学考古学会昭和7年5月刊）で報告されています。

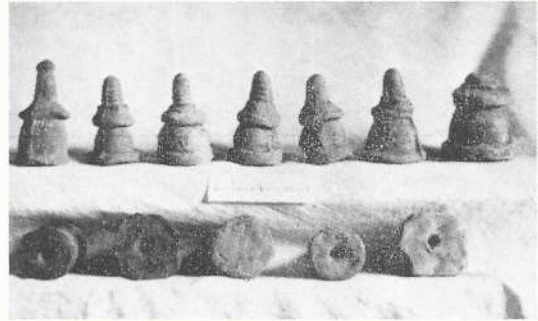
これらの泥塔は基礎・塔身・笠・相輪から成り立っており、円筒形を基調としています。泥塔の側面には基礎から相輪にかけて型合わせの痕跡を、はみ出した3mmほどの粘土の突出として確認できます。

### 東大福寺遺跡採集泥塔

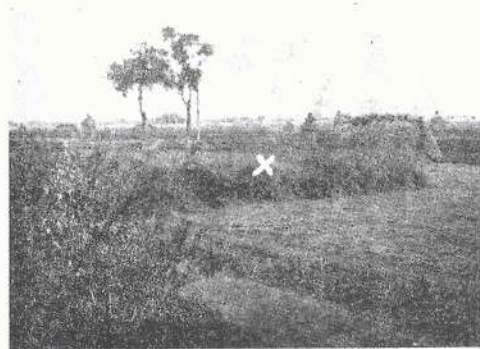
1の泥塔は、高さ62mm、基礎最大径56mm、塔身径44mmの大きさで、暗い黄橙色を呈する宝塔形の泥塔です。基礎・塔身・笠の部分は全容が遺存していますが、笠上の相輪は基底を遺して欠損しています。塔身の両面には阿弥陀梵字種子「キリーク」と釋迦梵字種子「バク」が陽出されており、側面には型合わせの痕跡を確認できます。また底部には最大径7mm、深さ28mmの小孔が穿たれています。

2の泥塔は、高さ77mm、基礎最大径42mm、塔身径31mmの大きさの完形品で、淡赤褐色を呈しています。相輪部には5条の突帯で九輪が表出されています。側面には型合わせの痕跡を顕著に確認できますが、塔身の梵字種子、底部の小孔は認められません。

3の泥塔は、笠と相輪を欠損した高さ35mm、基礎最大径39mm、塔身径30mmの大きさで、淡赤褐色を呈する資料です。基礎は高さ4mmほどで1・2のものより薄く造形されています。側面には、型合わせの痕跡を僅かに確認できます。底部には径9mm、深さ20mmの小孔が穿たれていますが、塔身には梵字種子などは表現



(3) 『銅鐸』創刊号で紹介された泥塔



(4) 宮古遺跡旧状



(5) 泥塔採集遺跡位置図



(全体)



(1)



(2)



(3)

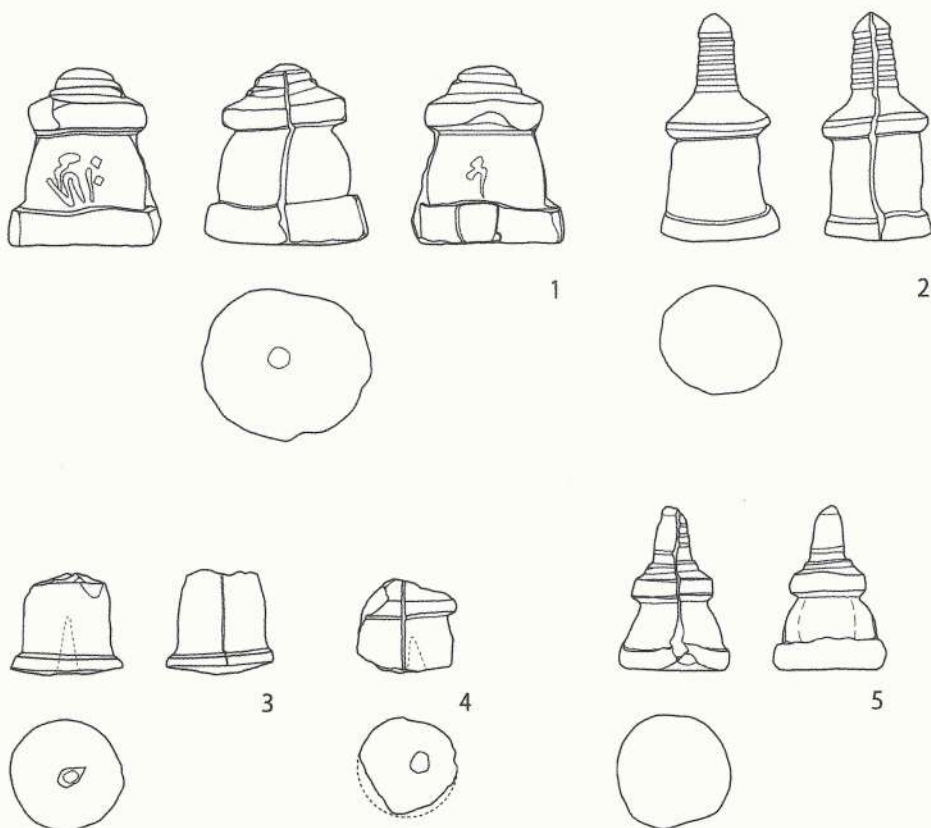


(4)



(5)

(6) 立正大学博物館所蔵泥塔



(7) 立正大学博物館所蔵泥塔 (1~4東大福寺 5出土地不明)

されていません。

4の泥塔は、塔身から笠にかけての一部が遺存したものです。高さ32mm、最大径34mmの大きさで、色調は淡赤褐色を呈しています。側面には型合わせの痕跡を僅かに確認でき、底部に穿たれた小孔の残存部分が径6mm、深さ11mmの大きさで認められます。

#### 出土地不明泥塔

5の泥塔は、相輪の先端を欠損する資料です。高さ55mm、基礎最大径39mm、塔身最大径32mmの大きさで、淡赤褐色を呈しています。相輪には4条の突帯で九輪を表わしています。側面には型合わせの痕跡を顕著に確認できますが、塔身の梵字種子、底部の小孔は認められません。正確な出土地は不明ですが、奈良県内の出土と想定されます。

以上の5点の泥塔は、1・4・5と2・3の2

種類に分類できます。1・4・5は塔身部分が低い円筒形を呈するもので、2・3は塔身部が高い円筒形を呈するものです。底部に小孔を穿つ資料は両方に認められます。これらの所産年代は明確にはなっていませんが、底部に小紙を納入するための小孔を有する資料が小塔本来の造形と考えられ奈良時代、小孔を欠く資料が平安時代を主体として造作されたことが想定されています。

東福寺遺跡における経塚造営の目的は、明確にはなっていません。泥塔の底部に穿たれた小孔には、本来陀羅尼とともに願文も記された小紙が入れられていたものと考えられますが、遺存してはいません。

東福寺遺跡から出土したものと考えられる資料は全国各地に所蔵されています。今後の集成研究が重要となります。

## 伯耆竹内経塚出土泥塔（立正大学博物館寄託品）

立正大学博物館に寄託された泥塔資料は12点あり、すべて伯耆竹内経塚（鳥取県東伯郡琴浦町）からの出土品です。昭和初年に旧東伯郡以西村竹内佛隈の地から多量に出土した扁平な泥塔資料は、出土地が智積寺の批定地であることによってか智積寺泥塔と呼称されてきています。この資料の学界への紹介は、昭和11年に特徴的な中世石造供養塔の視察に来た川勝政太郎氏によるものが最も古いものです。

泥塔出土の地は、日本海に注ぐ勝田川の西岸の段丘縁辺であり、全面を人頭大の河原石で覆われた径5m、高さ1.7mほどの塚が遺存しています。塚上には60cm大の長石が配されており、この内部が低くなっており泥塔の破片が出土しています。塚上には室町期の所産と思える五輪塔の部材が数点認められます。

この地からの出土資料は、全国に散逸して所蔵されています。各地に確認できる竹内経塚出土資料は、地主の小川氏宅184個、旧赤碕町教育委員会5個、鳥取県立博物館14個、倉吉市

立博物館76個、東京国立博物館75個、奈良国立博物館37個、京都国立博物館17個、京都大学博物館23個、長野県常楽寺美術館132個、旧服部和彦所蔵品100個など、確認総数約700個です。

竹内経塚出土泥塔は、長さ50～7mm、幅19～32mm、厚さ10～19mmの大きさの扁平泥塔です。造形の違いにより宝塔形と宝篋印塔形が知られています。塔身には地蔵菩薩の梵字種子である「カ」を表わし、基礎には経文を一字ずつ刻んでいます。泥塔の焼成状態は総じて良好であり、堅緻に仕上がっています。色調は焼成の状況により異なり淡赤褐色から淡黒褐色までの変化を示しています。

12点の寄託資料のうち1～9は宝塔形、10～12の3点は宝篋印塔形の泥塔です。1は幅32mmの大形の宝塔形資料ですが、上部の相輪部分を欠損しています。表面の基礎には「一万句」、裏面には梵字が刻まれており、他に類例のない貴重な資料です。2は完形の幅22mm、高さ69



(8) 伯耆竹内経塚の位置



mmの大きさの宝塔形泥塔です。基礎には「而」が記されています。3は相輪の先端を僅かに欠損する幅24mm、高さ57mmの大きさの宝塔形泥塔です。基礎には「諸」が記されています。

4は相輪の大藩と笠の一部を欠損する幅25mm、高さ50mmの宝塔形泥塔です。基礎には「四」が記されています。5は相輪を完全に欠損下幅25mm、高さ37mmの大きさの塔形泥塔です。基礎には「其」が記されています。6は完形の幅19mm、高さ56mm、厚さ12mmの大きさの幅の狭い宝塔形泥塔です。相輪には3条の突帯により九輪が表わされています。

基礎には「距」が記されています。7は幅26mmの大きさの宝塔形泥塔の破片で、基礎には「支」が記されています。8は笠と相輪を欠損した幅24mmの大きさの宝塔形泥塔です。基礎には「狼」が記されています。9は上下を欠損下幅22mmの大きさの宝塔形泥塔の破片です。基礎に記された文字は「言」と思われます。

10は相輪の先端を欠損した、幅23mm、高さ48mmの大きさの宝篋印塔形泥塔です。基礎には

「標」が記されています。

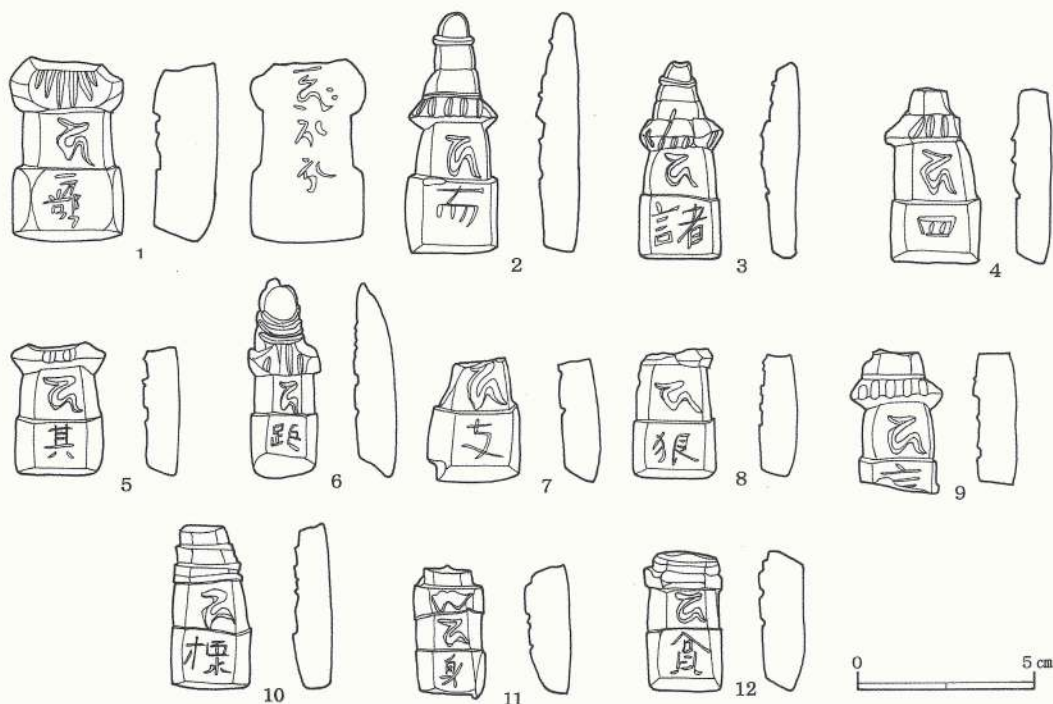
11も同じく相輪の先端を欠損した宝篋印塔形泥塔です。幅20mm、高さ37mmの大きさで、幅の広い軒の表面にはW状に表現されています。基礎には「身」が記されています。12も相輪の先端を欠損した、幅21mm、高さ40mmの大きさの宝篋印塔形泥塔です。基礎には「貪」が記されています。

竹内経塚からの出土泥塔の基礎には、寄託資料に確認できる如くに、1字を基本とする文字が記されています。

各地に所蔵されている資料中には、稀に複数の文字が記されている資料が確認され、これによって書写された経典を確認することができません。

現在までのところ11例の複数文字資料が確認でき、これらによって瓦経に書写された経典を推定することができます。

宝塔形泥塔の裏面に梵字のア・バンに続き「定慧力」、表面基礎部の平面と斜面に「莊嚴」と確認できる偈文は、妙法蓮華経第二方便品に相当



(9) 伯耆竹内経塚出土塔



(10) 立正大学博物館寄託泥塔写真

します。また宝塔形泥塔の裏面に梵字のア・バンに続き「如人」と確認できる偈文は、妙法蓮華經第三化譬喩品に相当します。また下半部を欠損した大形宝篋印塔形泥塔の裏面に梵字のア・バンに続き「止□」と認められる資料は、妙法蓮華經第二方便品の偈文に該当するものと考えられます。

宝篋印塔形泥塔の裏面に梵字のア・バンに続き「聞□信解」と認められる資料は、妙法蓮華經第七化城喩品の部分に相当し、宝塔形泥塔の裏面に梵字のア・バンに続き「我等長夜」と認められる資料は、妙法蓮華經第四信解品の偈文に該当します。

また、下半部を欠損した宝篋印塔形泥塔の裏面に「十千」と確認できる資料は、法華三經のうちの観普賢菩薩行法經の部分に該当するものと思われれます。

以上確認できる場所は妙法蓮華經二十八品のうちの六品分と、1例は法華三部經のうちの結經とされる観普賢菩薩行法經と想定できます。従って竹内経塚から出土した泥塔に書写された經典は、確認・想定された經典に開經とされる無量義經を加えた法華三部經であったものと考え

えられます。法華經の文字数は69384字といわれており、これに開結二經を加えた文字数は優に7万字を越えるものとなります。書写された經典の文字数に比較すると、現在確認できる各地に所蔵されている泥塔の資料数は約700点であり、全体の1パーセントにも満たない状況にあることがわかります。

確認できる場所は、泥塔に經典の文字を複数書写するにあたっては、裏面から表面への手順が確認できます。複数書写例は僅少例であることから、書写にあたって節目となる箇所で行われたものと考えられます。

竹内経塚出土の泥塔を検討すると、その表面には木目が確認され、木型を用いて製作されたことが考えられます。しかし、単純に木凹型を作り、これに粘土を充填して成形し、取り出して焼成したとは考えられません。極小に過ぎる木凹型の内部に細かな塔形を彫刻して成形することは不可能なことと思われれます。

想定できる場所は、①・木製扁平塔形の製作、②・木製木型を粘土板に押圧して仕上げた多数の粘土凹型の製作、③・多数の粘土凹型を焼成して多数の粘土凹型を完成する、④・多数

の粘土凹型を用いて泥塔素形を製作する、⑤・泥塔素形に経典を書写する、⑥・泥塔素形を焼成して完成する、という泥塔製作過程の復元です。ここには7万に近い数値を必要とする、大量製作を意図した製作体制が想定されます。

確認できる資料には願文を記したものは知られておらず、泥塔製作の意図は不明です。宝塔形、宝篋印塔形を問わずに塔身には地蔵の梵字種子が陽出されています。この背景としては、竹内経塚の所在する勝田川によって開析された谷の最奥部に所在する船上山とのかかわりが考えられます。

後醍醐天皇は元弘元(1331)年に鎌倉幕府討幕のために挙兵したものの、幕府軍に敗れ隠岐に配流されました。元弘3年に至って配流の地である隠岐からの脱出を果たした後醍醐天皇が、地元の名族の長年を頼って拠点とされたのが船上山であり、この山上に所在した智積寺の本尊が地蔵であることとの関連も考えられています。

竹内経塚出土泥塔の正確な埋納年代は不明です。資料の報告ごとに研究者によって異なって、平安時代・鎌倉時代・室町時代と様々に報告されています。瓦経と扁平形泥塔の分布は西日本とくに中国地方を中心として展開しており、瓦経の様相を勘案して平安時代としたものと思われる、また経文を瓦経に纏まって書写する段階から個別に泥塔に記す段階への変遷を考慮して鎌倉時代と考えられたものと思われる。

また室町時代とするのは、総体としての泥塔の立体形から扁平形への変遷を根拠とされたものと思われるが、いずれも確かな根拠とは思われません。

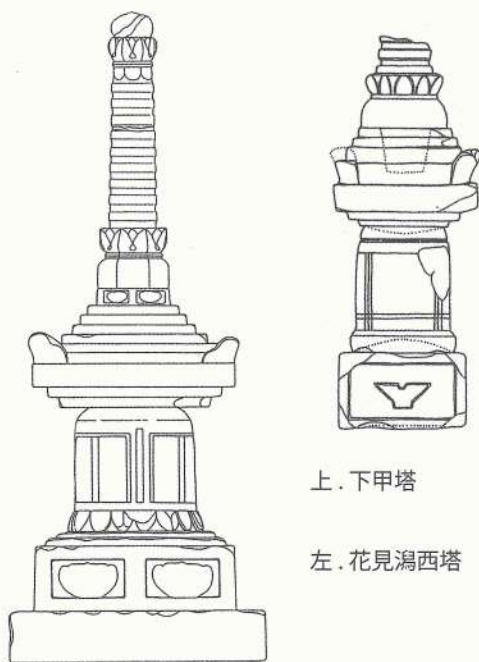
竹内経塚周辺の仏教文化的環境を考慮すると、赤碕の地に特徴的な「赤碕塔」の存在が重要な位置を占めるものと思われる。円筒形の塔身に宝篋印塔に特徴的な笠・相輪を組み合わせた特異型式の石造供養塔であり、昭和11年に川勝政太郎氏により、所在する地名をもって命名されました。

現在勝田川により開析された赤碕の谷に6例、西接する中山の地に1例の合計7例が確認されています。

いずれも明確な紀年銘を欠いており所産年代は明確にはなりません。最新の事例と考えられる中山・下甲塔には応永の年号も想定でき、赤碕塔を構成する個別要素の検討から、14世紀の南北朝期を主体として造立されたものと考えられます。

地域に特徴的な石造供養塔の造立は、これを可能とした仏教文化の醸成、支援した檀越の存在が前提となります。鎌倉末期の当該地には、隠岐を逃れ出た後醍醐天皇が討幕の拠点とされた船上山が位置しており、鎌倉幕府軍は赤碕の谷を遡上して戦っています。

当該地における赤碕塔の造立、泥塔経塚の造営などの特異な仏教文化の展開は、建武の親政が成って、いったん世情が安定した後の南北朝期であった可能性が高いものと考えられます。



(11) 赤碕塔

## 伯耆竹内経塚出土泥塔（米子市立山陰歴史館足立コレクション）

鳥取県米子市立山陰歴史館には、初代館長を務めた足立正氏が蒐集した考古資料である足立コレクションが所蔵されています。足立正氏は慶應元(1865)年に鳥取県西伯郡上道村(境港市)に生まれ、明治14年に松江師範学校を卒業し、明治33年から昭和3年まで淀江町(米子市)にあった養良高等小学校の校長を務められています。昭和4年から9年は第12代の境港町長に就任し、昭和15年から20年まで山陰歴史館の初代館長を務め、昭和22年に没しています。中央の考古学者との係りは、明治34年の坪井正五郎の淀江所在の石馬の視察を案内し、その後訪れた関野貞・沼田頼輔・鳥居龍蔵も案内されています。

足立コレクションには、地元伯耆地域の先史時代から歴史時代に及ぶ考古資料が主体をなしており、仏教遺物としては竹内経塚出土の泥塔、大日寺出土の瓦経が含まれています。

足立コレクション中の竹内経塚出土泥塔は、34点あります。このうちの20点が完形であり、

残る14点の資料も相輪を欠損する程度のもが多く、完全な破片となっているものは数点です。この状態は、昭和初年の出土後それほど時間が経過しないうちの蒐集かと思われます。

扁平泥塔資料のうち12点が高さ45～60mm、幅21～27mmの大きさの大形の宝塔形泥塔であり、16点は幅15～22mm、高さ41～50mmの大きさの小形の宝塔形泥塔です。宝篋印塔形泥塔は5点であり、いずれも相輪を欠損している。幅18～21mmの小形のものです。

基礎に記された一字ずつの経文は、「智・嘆・扱・裕・加・於・復・則・路・最・咒・大・又・百・偈・十・強・説・諸・琅・見・阿・丙・訶」などです。

足立コレクション中には、立体的造形の泥塔が2点含まれています。1は立正大学博物館所蔵資料に類似した宝塔形泥塔であり、基礎径46mm、高さ65mmの完形品です。相輪には5条の突帯で九輪を表わしており、側面には型合わせによる粘土帯の突出を顕著に確認できます。塔身の梵字種子、底部の小孔などは認められませ

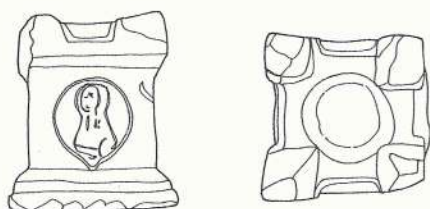
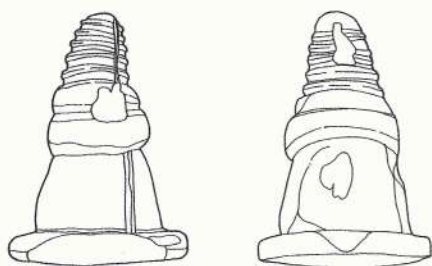


1



2

(12) 足立コレクション泥塔写真(1)



(13) 足立コレクション泥塔実測図(1)

ん。奈良県東福寺遺跡からの出土と考えられる資料です。

2は立体的造形の宝篋印塔形泥塔です。平面は1辺43～45mmの方形、高さは55mmの大きさで、相輪を欠損しています。塔身の4面には月輪内に如来座像を線刻で表現していますが、明確ではありません。笠部の4隅には特徴的な隅飾りが表わされています。

この泥塔と同巧の資料は、伊勢松阪・大乘寺跡から出土しています。相輪は4条の突帯を表わす低いものであり、完形の総高は73～76mm

の大きさです。所産年代は石造宝篋印塔の形態との比較から鎌倉時代と想定されています。足立コレクション中の資料も大乘寺跡からの出土と思われます。國學院大學資料館で所蔵する「服部和彦コレクション」に9例含まれている同巧の資料も、伊勢・大乘寺跡出土と考えられるものです。

1・2の資料は、足立正氏が地元竹内経塚出土泥塔との比較検討のために入手されたものと考えられます。



(14) 足立コレクション泥塔写真 (2)



(15) 足立コレクション泥塔実測図 (2)

## 2. 瓦経

瓦経とは、方形あるいは長方形の粘土板に、經典を書写して焼成したものをいいます。日本では、平安時代の終わりの永承7(1052)年に、釈尊の教えのみが残り悟りを得ることができなくなる末法の世に入ると信じられました。この末法思想の展開のなかで、永く經典を残すために埋経という行為が考えられました。埋経は、主に紙に経を書き写した紙本経に様々な品物を副えて埋納して経塚を造営して果たされました。

埋経は、釈尊入滅の56億7000万年後に、末法の世の衆生を救済するためにこの世に出現する弥勒菩薩に備えるために始まったものです。多くは紙に經典を書写した紙本経を埋納していますが、近畿地方から九州地方にかけての西日本では、不朽の材料である粘土板に經典を書写した瓦経が作られています。

経塚は弥勒信仰に則って造営されています。最古の年代である長徳4(998)年の大和・金峯山経塚では「随従弥勒慈尊聽聞」、寛弘4(1007)年の和・金峯山経塚では「仰願当慈尊成仏之時」、康和5(1103)年の伯耆・倭文神社経塚では「值遇慈尊出現之出世」と経筒に明記されており、弥勒信仰の所産であることが確認できます。

しかし承徳2(1098)年の備前・正八幡神社経塚資料には「為過去祖父祖母成仏也」と認められ、先祖供養を趣旨とした造営目的が知られます。これ以降には、弥勒信仰を表わす語句とともに、息災延命、無病平安、追善供養などの現世利益、あるいは現生安穩後生善処とする例が増加しています。

延久3(1071)年の紀年銘を有する伯耆大日寺瓦経(鳥取県倉吉市)には、「爲值諸佛出世爲結縁衆生同遊月輪界造備瓦版模鑿……」と願文が確認されます。

また天養元(1144)年の紀年銘が認められる播磨極楽寺瓦経(兵庫県香寺町)には「迄于慈氏下生五十六億七千萬歳之時為施不壞不朽之利

益……廣作佛事利益衆生值遇慈尊出生我等從彼極楽浄土更來斯処拜見此等」と刻された願文が知られています。これらに弥勒信仰に則った作善業を窺うことができます。

瓦経の表面には、周囲を囲む界線と行を区切る罫線が認められます。一般的には線刻されていますが、稀に墨書された資料も認められます。片面に15行、1行に17字程度の文字を粘土板が半乾燥状態にある時に、錐、篋などを使って書写しています。瓦経の罫線の欄外や側面の小口には、經典の種類や順序を明らかにする為の簡単な符丁が認められるものもあります。

瓦経を焼成した遺構は、現在確認されていません。播磨極楽寺瓦経願文には「……方今始自釋尊入滅二千一百六十餘年之比迄于生/慈氏下生五十六億七千萬歳之時爲/施不壞不朽之利益所修奇異奇妙之/善根也三業抽誠六情凝志精進潔齋/造清浄瓦其上奉彫写金剛界九會法曼荼羅……大般若四十二字一遍未焼之時以錐/書之書写之後積薪燒之是皆/六七日中如說懺悔一兩年間書写/終功末法萬年餘經雖滅唯願此曼/荼羅佛菩薩像頭密經典諸真言/羅久在地中至于當來星宿劫末利/物偏增而已古人有言曰瓦文不朽靖/而思之誠哉…」と確認できます。

末法の世において餘経が滅しても、清浄の瓦に錐を以て書写した瓦経は、地中に久しく在って時が至るまで不朽の經典として伝えることができるものであり、精進潔齋して兩年にわたり事にあつたことが知れます。

瓦経に書写された経文は、法華三経として開経である「無量義経」、「妙法蓮華経」、結経である「観普賢菩薩行法経」(観普賢経)、秘密三経として「大毘遮那成佛神变加持経」(大日経)、「金剛頂一切如来摄真実大乘現証大教王経」(金剛頂経)、「蘇悉地羯羅経」、および「大楽金剛不空真実三摩耶経」(理趣経)、仏説阿弥陀経など様々な經典があります。また、真言や陀羅尼、曼荼羅、

仏画なども書写されています。

瓦経は、偶然に発見されたものが多く埋経の様相が把握される例は稀ですが、肥前築山経塚は古墳の墳丘を利用して造営されたこともあり、学術的発掘によって埋経の過程が復元されています。①・瓦経を埋納するための土坑を掘り、②・土坑の底部に炭を敷き、小刀を納める。③・土坑中央に瓦経の主体をなす法華経を埋納する。④・他の經典と佛画を納める。⑤・經典の周囲に石を配置する。⑥・土坑を埋め戻す。

紀年銘の明らかな瓦経で、最も古いものが伯耆大日寺瓦経（鳥取県倉吉市）の延久3（1071）年です。また最も新しいものは、伊勢小町塚瓦経（三重県伊勢市）の承安4（1174）年のもの

です。末法に入った11世紀後半から12世紀後半までの100年間にわたって、近畿地方から九州地方までの西日本一帯で瓦経が製作されたことが確認されています。

1箇所の経塚からの瓦経出土数で最も多いのは、播磨極楽寺瓦経です。現存する拓本から489枚であることが確認されますが、埋納当時の正確な枚数は分かりません。石田茂作博士が出土した瓦経と經典を照合して瓦経の復元を試みられています。その結果では、伯耆大日寺経塚427枚、犬伏経塚（徳島県板野町）314枚、飯盛山経塚（福岡県福岡市）297枚、盆山経塚（京都府京都市）253枚であったと推測されています。

◆紀年銘の明らかな瓦経

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1 御生経塚 千葉県安房郡三芳村石童寺旧境内</li> <li>2 神奈川県横浜市中区金沢区称名寺</li> <li>3 埼玉県川越市豊多院</li> <li>4 在家経塚 長野県佐久市常和</li> <li>5 富山県水鏡市輪田スギガア</li> <li>◆6 越前山経塚 福井県丹生郡朝日町大谷寺越知山</li> <li>7 愛知県豊田郡豊田町伊良湖</li> <li>◆8 保美経塚 愛知県豊田郡豊田町福江</li> <li>9 朝熊山10号経塚 三重県伊勢市朝熊山</li> <li>10 朝熊山22号経塚 三重県伊勢市朝熊山</li> <li>◆11 小町経塚 三重県伊勢市小町塚</li> <li>12 亀塚経塚 京都市東山区今熊野町亀塚</li> <li>13 盆山経塚 京都市右京区桂陰原盆山</li> <li>14 三本木経塚 京都市右京区高雄椿ノ尾</li> <li>15 法金剛院経塚 京都市右京区花園深瀬法金剛院</li> <li>16 松尾山経塚 京都市右京区嵯峨松尾神社</li> <li>◆17 木幡 京都府宇治市木幡</li> <li>18 護国寺経塚 京都府八幡市八幡大谷</li> <li>◆19 正教寺経塚 京都府船井郡園部町武福寺</li> <li>20 道勤山経塚 京都府福知山市牧道勤山</li> <li>21 橋寺 奈良県高市郡橋寺</li> <li>22 石峯寺経塚 兵庫県神戸市北区淡河町石峯寺</li> <li>23 在田寺経塚 兵庫県三木市別所町在田寺</li> <li>24 書写山経塚 兵庫県姫路市書写山</li> <li>◆25 橋桑寺経塚 兵庫県神崎郡香寺町橋桑寺</li> <li>26 樂音寺経塚 兵庫県朝来郡山東町樂音寺</li> <li>27 金崎経塚 鳥取市伏野金崎</li> <li>28 滝谷経塚 鳥取県八頭郡河原町八日市</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆29 大日寺経塚 鳥取県倉吉市樺</li> <li>30 間山経塚 岡山県英田郡美作町</li> <li>31 田中経塚 岡山市今村</li> <li>32 小岡山経塚 岡山市沢田</li> <li>33 安養寺1号経塚 岡山県倉敷市浅原</li> <li>◆34 安養寺2号経塚 岡山県倉敷市浅原</li> <li>35 西園寺経塚 広島県尾道市西久保町</li> <li>36 西金寺経塚 広島県御調郡向島町</li> <li>37 神念寺経塚 徳島市園府町矢野</li> <li>◆38 犬伏経塚 徳島県板野郡板野町</li> <li>39 八経谷経塚 徳島県板野郡板野町川端</li> <li>40 筆塚経塚 徳島県板野郡板野町藤漢</li> <li>41 赤田山経塚 徳島県板野郡土成町成当</li> <li>42 中村 徳島県三好郡三好町中村</li> <li>43 安養寺経塚 香川県香川郡香川町大野</li> <li>44 八幡神社経塚 香川県丸亀市本島町泊浦</li> <li>45 香川県経塚歌部佐岡寺</li> <li>46 王蓮敷経塚 香川県仲多度郡満濃町</li> <li>47 辻ノ内経塚 愛媛県北条市善徳寺</li> <li>48 大羅敷経塚 高知県香美郡香北町在所</li> <li>49 高知県香美郡野市町</li> <li>50 富士原経塚 福岡県宗像市赤間</li> <li>51 富崎経塚 福岡県東区富崎</li> <li>52 愛宕山経塚 福岡県西区雄洪</li> <li>◆53 飯盛山経塚 福岡県西区飯盛山</li> <li>54 日吉神社経塚 福岡県太宰府市観世</li> <li>55 靈仙寺経塚 佐賀県神埼郡東吾妻村松隈</li> <li>◆56 築山経塚 佐賀県佐賀郡大和町尼寺</li> </ul> |
|---|---|



(16) 瓦経出土遺跡分布図

## 筑前飯盛山瓦経（立正大学博物館所蔵）

立正大学博物館所蔵の瓦経は、下部側面に墨書で「飯盛山」と書かれてあり、福岡県福岡市西区に所在する飯盛山経塚からの採集品であることがわかります。

大きさは遺存する横幅 12.0cm、縦幅 10.0cm、厚さ 1.6cm を測り、色調は淡黄橙色を呈しています。表裏に 6 行の経文を確認することができ、罫線による 1 行の幅は 1.8cm です。この幅をもって 10 行で復元すると、縦 22cm、横 19cm ほどの大きさと推定できます。

遺存部分に認められる経文は、図示したように、『法華経』巻五 安樂行品の一部であることがわかります。

飯盛山経塚は、早良平野の西にそびえる標高 382.4 m の飯盛山の山頂に瓦経が埋納された遺跡です。明治 10 (1877) 年頃に、江藤正澄氏により瓦経片 34 点が発見され、その後大正 13 (1924) 年に、瓦経片が発見された近くから経筒が発見されています。瓦経には永久 2 (1114) 年の紀年銘が知られ、瓦経片から法華経 208 枚・無量義経 23 枚・観普賢経 21 枚・仁王経 39 枚・阿弥陀経 6 枚・般若心経 1 枚の計 297 枚が埋納されたものと推定されています。

飯盛山瓦経は、17 字 10 行に規格化されて製作されています。破片で確認された願文には「……日期龍花三會之證明安靈祇四社之／……千里之外者結縁貴賤之家門有朱佈／……一乘一味法雨普樹三千世界潤人天於一時之内／」と確認でき、弥勒信仰に則って広く衆生に結縁して極楽往生を願ったことがわかります。

結縁衆として楹村、僧永厳、僧實憲、僧慶誉など僧侶 12 人、「當時郡司 壬生信道 介

壬生貞宗／……壬生貞時」、藤原貞元、伴友近、平久宗など多数の人名が認められ、在地官人を含む有力層を結縁衆として取り込んで経塚が造立されたことがわかります。

飯盛山瓦経では、書写された經典の筆跡の鑑

定により、①・飯盛山瓦経のみに認められるものと、②・飯盛山経塚の近隣に造営された愛宕山経塚、霊仙寺跡からの出土品に共通するものが区別されています。立正大学博物館で所蔵する『法華経』巻五安樂行品の破片は、①類であることが確認できます。



(18) 飯盛山経塚位置図



(19) 飯盛山遠景



(20) 飯盛山山頂に建てられている経塚発見の碑





(21) 飯盛山経塚出土瓦経【妙法蓮華経 卷第五安樂行品】

大きさ：最大縦 10cm / 横 12cm

所 蔵：立正大学博物館



(22) 飯盛山経塚出土瓦経拓影図

|  |   |
|--|---|
| <p>〔觀一切法皆無所有猶如虛空無有堅固〕</p> <p>〔不生不出不動不退常住一相是名近處〕</p> <p>〔若有比丘於我滅後入是行處及親近處〕</p> <p>〔說斯經時無有怯弱菩薩有時入於靜室〕</p> <p>〔以正憶念隨義觀法從禪〕 定起為諸國王</p> <p>〔王子臣民婆羅門等開化〕 演暢說斯經典</p> <p>〔其心安隱無有怯弱文殊師利〕 是名菩薩</p> <p>〔安住初法能於後世說法華經〕</p> <p>〔又文殊師利如來滅後於末法中欲說〕 是經</p> <p>〔應住安樂行若口宣說若讀經時不樂說〕 人</p> | <p>〔兇險相撲種種嬉戲諸姪女等盡勿〕 親近</p> <p>〔莫獨屏處為女說法若說法時無〕 得戲笑</p> <p>〔入里乞食將一比丘若無比丘〕 一心念佛</p> <p>〔是則名為行處近處以此二〕 處能安樂說</p> <p>〔又復不行上中下法有為〕 意為實不實法</p> <p>〔亦不分別是男是女不德〕 諸法不知不見</p> <p>〔是則名為菩薩行處一切諸法空無所有〕</p> <p>〔無有常住亦無起滅是名智者所親近處〕</p> <p>〔顛倒分別諸法有無是實非實是生非生〕</p> <p>〔在於閑處修攝其心安住不動如須彌山〕</p> |
|--|---|

(23) 瓦経経文（右側が表面、左側が裏面、行書体部分が遺存部分）

## 播磨極楽寺瓦経（池上本門寺靈宝殿所蔵）

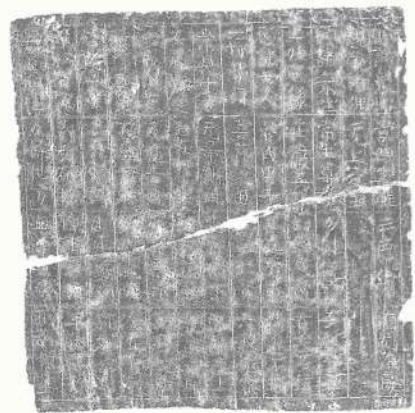
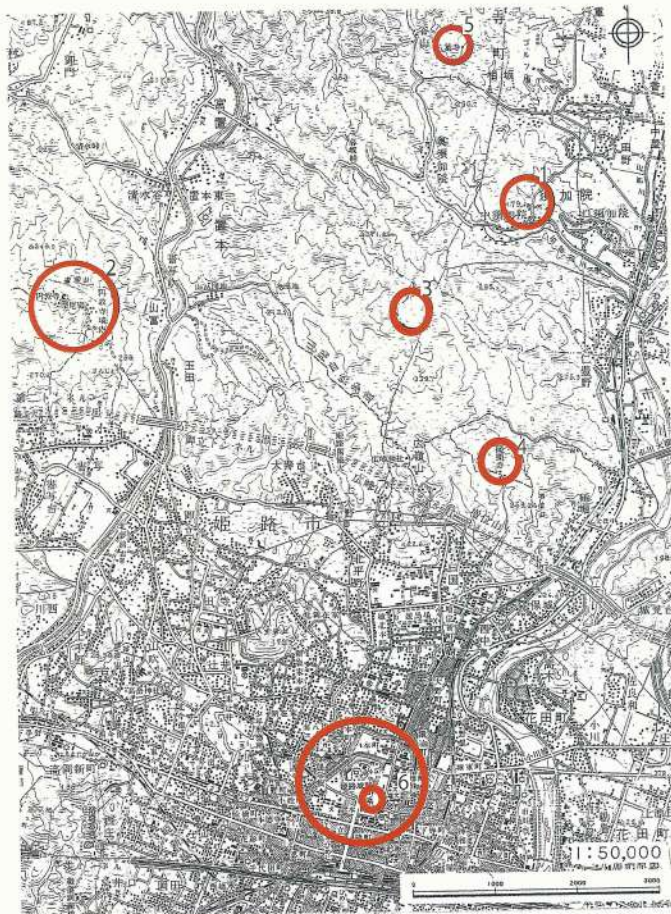
播磨極楽寺は、かつて兵庫県姫路市香寺町須加院周辺に所在していたと考えられる寺院で、現在この地には常福寺が所在しています。瓦経は、寛政11（1799）年に、常福寺裏山にあたる地点から発見されたと伝えられています。発見された瓦経の願文中に極楽寺の名が認められたため、これらは極楽寺瓦経と呼ばれることとなりました。

この時発見された瓦経の枚数はおよそ500枚に及び、土製仏像・泥塔なども伴っていたと伝えられています。時の姫路藩主であった酒井忠道は、これらの瓦経を取り寄せ、接合や採拓などの整理作業を命じたうえ保管しました。しかし、これらの大部分は、明治維新の渦中に所在不明となりましたが拓本だけが酒井家に伝わり、戦後東京国立博物館の所蔵となりました。その

後、平成8年に行われた姫路城の堀の調査の際に、幻となっていた極楽寺瓦経の一部の51点が出土しました。これにより、極楽寺瓦経は再び日の目を見ることとなったのです。

極楽寺経塚は、京都東寺の真言僧で中央貴族日野氏に連なる禅慧が、先祖が建立した氏寺である極楽寺へ来て造営したものです。瓦経製作にあたっては、播磨の有力寺院である書写山円教寺をはじめ彌高寺、増井寺、八徳寺の僧侶の助力を願っています。

極楽寺瓦経に確認できる經典の種類は、法華三経の「無量義経」、「妙法蓮華経」、「観普賢菩薩行法経」、秘密三経の「大毘遮那成佛神変加持経」、「金剛頂一切如来撰真実大乘現証大教王経」、「蘇悉地羯羅経」のほか「大楽金剛不空真実三摩耶経」、「仏説阿弥陀経」、「般若心経」、「仁王経」、



(24) 播磨極楽寺瓦経拓本

1. 瑞雲山常福寺（極楽寺 瓦経塚推定地）
2. 書写山円教寺
3. 彌高寺推定地
4. 増井山隨願寺
5. 八徳山八葉寺
6. 特別史跡姫路城跡（小丸が瓦経出土地点）

(25) 播磨極楽寺位置図

「宝篋印陀羅尼經」、「金光明經」のほかにも12種類、総計で24種類の多数を数えます。これは西日本を中心に560箇所以上で造営された瓦経塚のうちで最多の經典数を誇るものです。

これらは康治2(1143)年と天養元(144)年の2年にわたって製作されており、大きさはほぼ1辺が28～29cmで厚さ2cmほどの大きさに統一されています。康治2年に製作された瓦経は、瓦経面に記された行数が13～16行と幅があるのに対し、天養元年に製作されたものは、ほぼ13行と14行に限られることが確認されており、規格化がすすんだ事がわかります。

極楽寺瓦経には、11枚に及ぶ願文を刻した瓦経が含まれます。ここには「廣作佛事利益衆生／乃至值遇慈尊出世我等從彼／極楽浄土更來斯處拜見此等／廣作佛事普利衆生慈氏以後／現在諸佛至于未來千□出世／我等更來斯處再見此等廣作佛事利益／衆生自他同證无上菩提」と弥勒信仰をうかがうことができ、「出離生死頓證菩提

殊別聖朝安穩／鎮護国家……玉躰安穩／寶寿長遠無邊御願決定／円満國中安穩諸人快樂天下／法界平等利益」とあります。

願文からは、末法思想や往生浄土思想だけでなく、追善供養、現世安穩、息災延命、福智増長など、現生利益、逆修供養などの広さまざまな利益を求めていることが知られます。

池上本門寺靈宝殿に所蔵されている極楽寺瓦経片は、和田千吉旧蔵品の一枚で、理趣経・仁王経とともに護国三経の一つとされる金光明經の卷第四・捨身品第十七の破片です。縦14. cm、横8.5 cmの大きさで、表裏7行ずつの経文が認められ、復元すると14行で記されたことがわかります。

極楽寺瓦経のうち、金光明經を書写した瓦経は、巻一・16枚、巻二・18枚、巻三・17枚、巻四・17枚の合計68枚となります。金光明經を記した瓦経は天養元年に彌高寺僧の嚴智により書写されたことが確認できます。



(26) 播磨極楽寺瓦経【金光明經卷第四】

大きさ；最大縦14.3cm／横8.5cm  
所蔵；池上本門寺靈宝殿

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| 我今二乳 | 俱時汗出 | 身體苦切 | 如被針刺 |
| 我見如是 | 不伴瑞相 | 恐更不復 | 見所愛子 |
| 今以身命 | 奉上大王 | 願速遣入 | 求覓我子 |
| 夢三箇難 | 在我懷抱 | 其最小者 | 可適我心 |
| 有鷹飛來 | 奪我而去 | 夢是事已 | 即生優惱 |
| 我今恐怖 | 恐命不濟 | 願速遣人 | 推求我子 |
| 是時王妃 | 說是語已 | 即時問絕 | 而復覺地 |
| 王聞是語 | 復生憂惱 | 以不得見 | 所愛子故 |
| 其王大臣 | 及諸眷屬 | 悉皆聚集 | 在王左右 |
| 哀哭悲號 | 聲動天地 | 爾時城內 | 所有人民 |
| 聞是聲已 | 驚愕而出 | 各相謂言 | 今是王子 |
| 爲活來耶 | 爲已死亡 | 如是大王 | 常出軟語 |
| 爲衆所愛 | 今難可見 | 已有諸人 | 入林推求 |
| 不久自當 | 得定消息 | 諸人爾時 | 惶惶如是 |

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| 而復悲號 | 哀動神祇 | 爾時大王 | 即從座起 |
| 以水灑妃 | 良久乃蘇 | 還得正念 | 微聲問王 |
| 我子今者 | 爲死活耶 | 爾時王妃 | 念其子故 |
| 倍復懷惱 | 心無暫捨 | 可惜我子 | 形色端正 |
| 如何一旦 | 捨我終亡 |      |      |
| 云何我身 | 不先棄沒 | 而見如是 | 諸苦煩事 |
| 善子妙色 | 猶淨蓮華 | 誰壞汝身 | 使令分離 |
| 將非是我 | 昔日怨讐 | 快本業緣 | 而殺汝耶 |
| 我子面目 | 淨如明月 | 不圖一旦 | 遇斯禍對 |
| 寧使我身 | 破碎如塵 | 不恰我子 | 喪失身命 |
| 我所見夢 | 已爲得報 | 直我無情 | 能堪是苦 |
| 如我所夢 | 牙齒墮落 | 二乳一時 | 汗出流出 |
| 必定是我 | 失所愛子 | 夢三箇難 | 鷹奪一去 |
| 三子之中 | 必定失一 |      |      |

(27) 播磨極楽寺瓦経 経文

## (参考) 築山経塚

築山経塚は、佐賀県佐賀市(旧大和町)に所在します。全長60mの横穴式石室を有する前方後円墳である築山古墳の墳丘を利用して造営された経塚です。

瓦経の多くは偶然の機会による発見が殆どであり、詳細な埋納状況が分かる例は僅少ですが、築山経塚は埋納方法が明確になった貴重な例として注目されるものです。

築山経塚から発見された瓦経は、妙法蓮華経166枚、無量義経20枚、観普賢経18枚、阿弥陀経6枚、般若心経2枚、法華懺法11枚のほか、奥書1枚、仏画を刻したものの5枚、無地瓦2枚の合計231枚です。

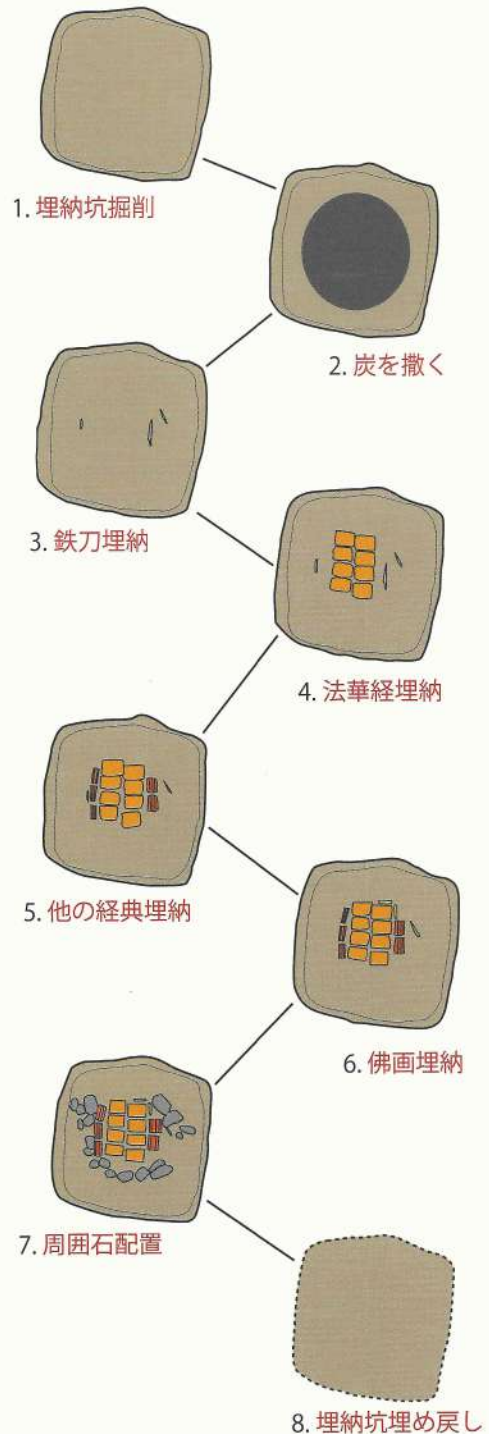
経文は12行、17文字を基本として書写されており、横15.2～16.5cm、縦19.6～20.7cmの大きさです。

奥書には「天養元年歳次甲子二日日次己卯／大日本國鎮西肥前國深／溝郡尼寺邊仁天書写／供養畢／願主僧定照／并清原氏」と認められ、法華懺法の最終巻には「天養元年十月五日午時了／勸進僧定照／大檀主草部貞行」と記されています。

これによって、天養元(1114)年10月に勸進僧定照が主体となって、清原氏および草部氏の結縁と清原氏の発願によって瓦経塚が造営されたことが分かります。

経塚の構築の順番は、右図に示したように、以下の9段階に想定されています。

①・埋納坑の掘削、②・土坑底面に炭を敷く、③・鉄刀3点の埋置、④・中央部への法華経の埋納、⑤・法華経の周囲へ他の經典を埋納、⑥・佛画を埋納、⑦・瓦経の周囲に河原石を配置、⑧・埋納坑を埋め戻す。



(17) 瓦経埋納工程復元図

## 伊勢小町塚瓦経（池上本門寺靈宝殿所蔵）

伊勢小町塚経塚は、三重県伊勢市浦口3丁目に所在します。この土地は江戸時代頃より墓地として利用されたため、地形の改変が著しく、当時の様子を知ることは出来ません。

出土品には多量の瓦経片のほかに、阿弥陀如来坐像や承安4（1174）年銘をもつ陶製光背などが知られています。瓦経にも同年の紀年銘が刻まれており、これらが同時期に製作されたことがうかがえます。ここに確認できる紀年銘は、瓦経塚の最新の事例であり、注目される資料となっています。

小町塚経塚は、瓦経に確認される願文によって大願主金剛仏子遵西や沙門西観が中心となって、有力者である度会・荒木田・佐伯・磯部氏などを結縁して造営されたことが知られます。

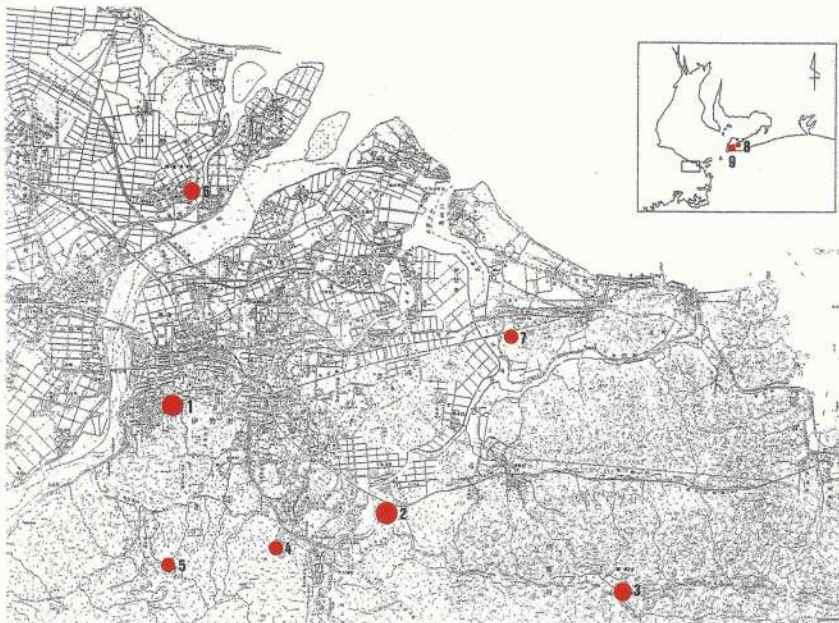
現在各地に分散されて所蔵されている小町塚経塚出土の瓦経片は、近隣に所在した菩提山経塚出土品と混在しています。これらを総合・検討した結果、小町塚経塚と菩提山経塚は、同時に伊勢湾を挟んだ対岸に位置する渥美半島先端の「三河國渥美郡伊良湖郷」で製作され、埋納されたことが推測されています。

伊勢小町塚瓦経に書写された經典は、妙法蓮

華経・無量義経・観普賢菩薩行法経（観普賢経）・大毘遮那成佛神变加持経（大日経）・金剛頂一切如来真实摄大乘现証大教王経（金剛頂経）・蘇悉地羯羅経・般若心経・大衆金剛不空真实三摩耶経（理趣経）・宝篋印陀羅尼経・梵字真言・随求即得陀羅尼・金剛界礼懺文などが確認されています。この經典の数は、他の瓦経塚と比較してもかなり多い部類に属するものです。小町塚瓦経は、すべて1行15字の17行で統一された規格で製作されている点も特徴となっています。

池上本門寺靈宝殿には、和田千吉が旧蔵していた104点の瓦経片（重要美術品）が所蔵されており、この度は、大毘遮那成佛神变加持経（大日経）片4点（1～4）、大衆金剛不空真实三摩耶経（理趣経）片1点（5）、無量義経片1点（6）、般若心経片1点（7）、妙法蓮華経1点（8）、蘇悉地羯羅経片1点（9）のほかに願文などを記したものの展示しています。

1は大日経巻第四の破片であり、表裏7行を確認することができる、上端角部の破片です。裏面には「度會□／承安四□／三河國□／時白瓷□／大勸進□」と、願主名と思われる人名の



(28) 伊勢周辺の経塚

1. 小町塚経塚
2. 菩提山瓦経塚
3. 朝熊山経塚群
4. 蓮台寺滝ノ口経塚群
5. 亀谷経塚
6. 丁塚経塚
7. 豆石山経塚
8. 保美瓦経塚
9. 伊良湖瓦窯跡



1

【大日經卷第四】

大きさ；最大縦 14.3cm / 横 15.0cm  
所 蔵；池上本門寺靈宝殿



2

【大日經卷第四】

大きさ；最大縦 12.2cm / 横 20cm  
所 蔵；池上本門寺靈宝殿



3

【大日經卷第五】

大きさ；最大縦 17.7cm / 横 16.5cm  
所 蔵；池上本門寺靈宝殿

(29) 伊勢小町塚瓦経 (1)



4

【大日經卷第六】

大きさ：最大縦 16cm / 横 19.5cm

所 蔵：池上本門寺靈宝殿



5

【理趣經】

大きさ：最大縦 8.8cm / 横 11.8cm

所 蔵：池上本門寺靈宝殿



6

【無量義經】

大きさ：最大縦 19cm / 横 20cm

所 蔵：池上本門寺靈宝殿

(30) 伊勢小町塚瓦經 (2)



7

【般若心經】

大きさ：最大縦 8.6cm / 横 6.4cm  
所 蔵：池上本門寺靈宝殿



8

【妙法蓮華經卷第五】

大きさ：最大縦 17.4cm / 横 9.2cm  
所 蔵：池上本門寺靈宝殿



9



【蘇悉地經卷下】

大きさ：最大縦 14.3cm / 横 15cm  
所 蔵：池上本門寺靈宝殿



10



【悉曇列記板】

大きさ：最大縦 19cm / 横 20cm  
所 蔵：池上本門寺靈宝殿





11

**【願文】**

大きさ；最大縦 16.6cm / 横 10.4cm

所 蔵；池上本門寺霊宝殿

願文が記されており、檀越などの名前が見られます。



12

**【願文】**

大きさ；最大縦 16.3cm / 横 12.5cm

所 蔵；池上本門寺霊宝殿

願文の始まり部分がみられ、「承安四年甲午六月日」といった紀年銘や「三河國渥美郡伊良湖郷」などの地名が分かります。



13

**【曼荼羅】**

大きさ；最大縦 12.7cm / 横 20.5cm

所 蔵；池上本門寺霊宝殿



14

**【結縁交名】**

大きさ；最大縦 7.5cm / 横 13.3cm

所 蔵；池上本門寺霊宝殿

結縁者が記されている瓦経です。

一部、年号、製作地名が記されています。

2は大日経巻第四密印品第九の部分であり、表裏に9行が認められる瓦経の下端角部の遺存した破片です。

3は大日経巻第五秘密曼荼羅品第十一の部分であり、表裏に9行が認められる瓦経の上端部の破片です。

4は大日経巻第六嘱累品第三十一の部分であり、表裏10行が認められる瓦経の上端角部の破片です。裏面には8行の梵字真言が記され、末尾には「右奉書写處僧賢必□」と写経僧の名前を確認することができます。

5は理趣経般若波羅密多理趣品の部分であり、表裏6行が認められる上端角部の破片です。

6は無量義経説法品第二の部分であり、表裏10行が認められる瓦経の上端角部の大形の破片です。

7は般若心経を記した小形の破片であり、表裏3行分を確認できる。表面は「□即是空空即□/□子是諸法空□/□滅是故□」であり、裏面には「□安四年甲午六月□/□偶奉仕敬白□/」と製作年月を確認することができる。

8は妙法蓮華経巻第五提婆達多品第十二の部分であり、表裏4行を確認できる上端と側面の遺存した破片である。片面の欄外には「五卷二」と、經典の番号を付しています。

9は蘇悉地羯羅経巻下の部分であり、表裏7行が認められる上端角部の破片です。

10は片面に9行の梵字を列記した下端部の遺存片であり、他面には何も認められない悉曇列記板である。

11は経文の裏面に「沙門西観、檀越度會神主常章、大檀那度會氏、同心檀越度會春章、大中氏、丹生氏、比丘尼阿妙」などの結縁者の名を確認することができます。

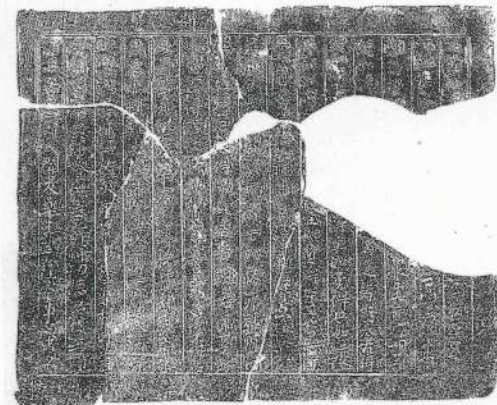
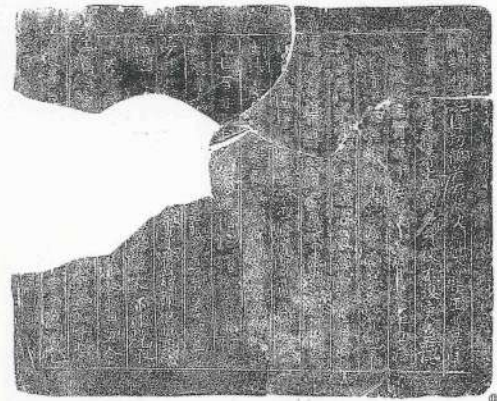
12は、経文の裏面に「承安四年甲午六月日、三河國渥美郡伊良期郷」と認められ、承安4(1174)年に渥美半島で製作されたことが確認できます。

13は片面に曼荼羅が描かれた破片であり、裏

面には「□内御桁」と記されている。

14は表裏両面に7行にわたって結縁者の名前が記された上端角部の破片です。確認できるところは、「宇治近□/上野常□/大中氏丹生□/平歌助平□/丹治貞弘□/金剛佛子定□/源太郎薊子□/」、「僧相西尼如来□/四郎大秦氏□/藤原醫□/僧玄海平□/承安四年□/美郡伊良□/」であり、多くの結縁者の名前と末尾に製作年と場所を確認することができます。

池上本門寺霊宝殿に所蔵されている伊勢小町塚瓦経片は、瓦経塚造営にかかわった檀越名、僧侶名、多数の結縁者の名が確認できる重要な資料です。



(34) 伊勢小町塚瓦経拓本

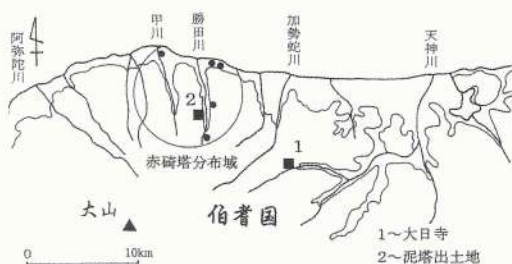
## 伯耆大日寺瓦経（米子市立山陰歴史館足立コレクション）

伯耆大日寺（鳥取県倉吉市桜）の裏山から瓦経が出土することは、江戸時代から知られていたようです。その後昭和初年に大日寺の上院跡伝承地から大量に出土し、このうちには最古の紀年である延久3（1071）年の瓦経が含まれており、注目される資料となりました。

大日寺出土の瓦経は各地に散逸して所蔵されており、総合的な研究が望まれているところです。現在確認できる資料は、倉吉市桜山大日寺6点、鳥取県立博物館51点、倉吉市立博物館12点、倉吉市三徳山三佛寺19点、鳥取県米子市立山陰歴史館14点、奈良国立博物館31点、京都国立博物館38点、神戸市立博物館4点、東京国立博物館3点、國學院大學資料館1点などが知られています。これらの資料は石田茂作博士、網干善教博士などにより研究され、資料的価値を高められてきています。

桜山大日寺は、嘉禄2（1226）年銘の木造阿弥陀如来像を有しており、鎌倉時代の隆盛を窺うことができます。また島根県出雲市の鱒淵寺には、大日寺旧蔵の梵鐘が所蔵されています。その銘文には「伯耆桜山大日寺上院之鐘、寿永二年癸卯五月戊午十九日壬午、改小成大之矣、守護六所権現十二大天十八善神等、別熊野権現王子等、若有貧取人誅罰身命焉」と記されており、平安時代の寿永2（1183）年に大日寺の上院の鐘を小さいものから大きいものへ改鑄したことが知られ、寺運隆盛にあったことがうかがわれます。また大日寺跡には多数の石造供養塔が遺存しており、鎌倉時代の13世紀代を中心に造立された五輪塔の存在は山陰地方屈指のものであり、当時隆盛を誇った天台寺院の存在を石造物から確認できます。

大日寺瓦経には、①・厚さ14mmほどで焼成のあまい灰白色を呈する、横幅9寸（27cm）、縦長7寸（21cm）ほどの長方形を基調とする一群と、②・厚さ8～11mmほどで焼成の堅緻な灰褐色を呈する、幅と長さがともに6寸（18cm）



(34) 伯耆大日寺の位置



(35) 伯耆大日寺跡

ほどの正方形を基調とする一群の2種類の資料が主体を占めています。

これらは、表面を瓦経の表面を区画する界線・罫線の表現法の違いと関連しており、書写された経典とも関連することが確認されています。瓦経の形状・焼成の違いは、瓦経製作の場所の違いを反映したものと考えられます。

東京国立博物館所蔵の資料には「延久三年歳次辛亥七月十六日美朔勝北高福寺爲法界平等利益書了 願主金剛弟子成縁」とあり、②類は伯耆国の南側に中国山地を挟んで位置する美作国において焼成された可能性も考えられています。

この大日寺瓦経には、東京国立博物館所蔵資料に、表面に9行で「阿弥陀大呪」を刻んだ裏面に、「仁賢劫中第四釋迦牟尼佛遺法砂門成縁／受菩薩大乘學戒入毘盧遮那佛三密加持／境界練磨普賢行願以一世善根爲值諸佛／出世爲結縁衆生同遊月輪界造備瓦版模鑿／大毘盧遮那經同秩

経巻儀軌等于時釋迦／如来末法延久三年歲次辛亥記者遍照金剛」の願文が記されています。

沙門成縁が末法の延久3年に衆生を結縁して諸仏の値遇のために瓦版を模鑿して造備したことが確認できます。沙門成縁は、ほかの瓦経では「願主成縁」、「勸進僧成縁」、「大勸進沙門僧成縁」などとも表記されており、大日寺瓦経製作の中心的存在であったことが知られます。

瓦経に確認できる經典を書写した人名には、永義、栄淳、永泉、教尋、純源、泉豪、行尊、光暹、真潤、宗順、忠禅、蓮胤、藤原経実、漢部熊童丸が確認されおり、書写した經典に従った区分が知られます。

大日寺瓦経で確認できる書写された經典の種類は、法華三経として「無量義経」、「妙法蓮華経」、「観普賢菩薩行法経」（観普賢経）、秘密三経として「大毘遮那成佛神变加持経」（大日経）、

「金剛頂一切如来撰真实大乘现証大教王経」（金剛頂経）、「蘇悉地羯羅経」、および「大樂金剛不空真实三摩耶経」（理趣経）、仏説阿弥陀経、法華懺法、法華三昧儀儀、胎藏金剛教法名号、般若心経の12種類に及びます。

大日寺瓦経製作を主導した勸進僧成縁は、『本朝新修往生傳』に記載された勢縁上人と同一人である可能性が指摘されています。勢縁は出雲國能義北郡の出身で、比叡山で修行したのち晩年伯耆國に移住し、承保年中(1074～1077)に命終しています。

成縁は末法の世に諸仏の出生に逢うことを願い、このために衆生を勸進・結縁して、成縁のもとに僧永義などが結縁して瓦経を製作したものと考えられます。

国土嚴淨廣大無比亦有四衆合掌願法  
又見自身在山林中修習善法証諸實相  
深入禪定凡十方佛  
諸佛身金色百福相莊嚴開法爲人觀察有是好夢  
又夢作國王捨宮殿眷屬及上妙五欲行詣於道場  
在菩提樹下而處獅子座求道過七日轉諸佛之智  
成無上道已起而轉法輪爲四衆說法經千萬億劫  
說無量妙法度無量衆生後當入涅槃知想盡慧滅  
若後惡世中說是第一法是人得大利益上諸功德  
妙法蓮華經從地踊出品第十五  
爾時他方國土諸來菩薩摩訶薩過八恒河  
沙數於大衆中起立合掌作禮而白佛言世  
尊若聽我等於佛滅後在此娑婆世界勸加  
精進護持讀誦書寫供養是經典者當於此  
土而廣說之爾時佛告諸菩薩摩訶薩衆止



善男子不須汝等護持此經所以者何我娑  
婆世界自有六萬恒河沙等菩薩摩訶薩一  
一菩薩各有六萬恒河沙眷屬是諸人羅能  
於我滅後護持讀誦廣說此經佛說是時娑  
婆世界三千大千國土地皆震裂而於其中  
有無量千萬億菩薩摩訶薩同時踊出是諸  
菩薩身皆金色三十二相無量光明先盡在  
此娑婆世界之下此界虛空中住是諸菩薩  
聞釋迦牟尼佛所說音聲從下發來一一菩  
薩皆是大衆唱導之首各將六萬恒河沙眷  
屬沉將五萬四萬三萬二萬一萬恒河沙等  
眷屬者況復乃至一恒河沙半恒河沙四分  
之一乃至千萬億那由他分之一況復千萬  
億那由他眷屬況復萬億眷屬況復千萬百  
萬乃至一萬況復一千一百乃至一十況復



(36) 伯耆大日寺瓦経 経文

(37) 伯耆大日寺瓦経

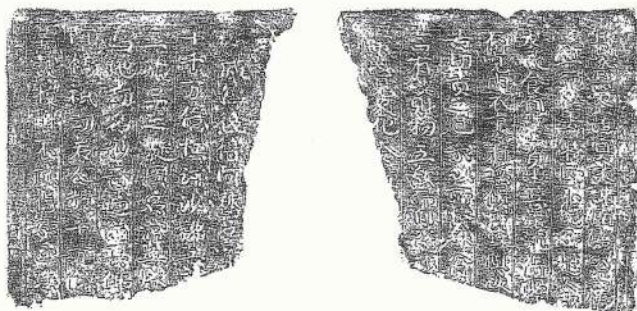
## 足立コレクションの大日寺瓦経

鳥取県米子市立山陰歴史館所蔵の足立コレクションには、大日寺瓦経の破片が14点確認できます。これらのうち大形の破片4点を図示しました。1は上端と側面が遺存した、幅13.4cm、長さ13.7cmの大きさであり、焼成はややあまく灰白色を呈する厚さ14mmを測るものです。瓦経の表面に7行、裏面に6行確認できる経文は、表面が妙法蓮華経の五百弟子受記品第八の部分であり、裏面は妙法蓮華経の授学無学人記品第九の部分に相当します。

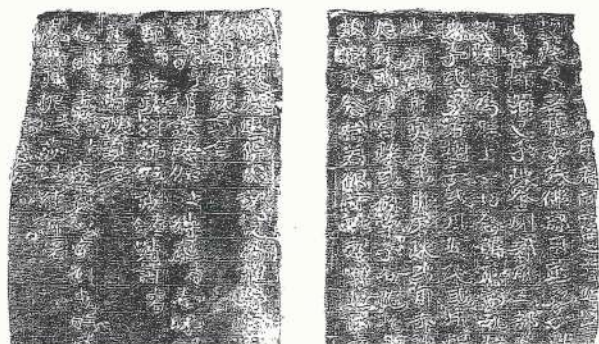
2は、端と一側面が遺存した、幅13.5cm、上下の長さ15.5cmの、焼成のややあまい淡灰色を呈する、厚さ13.5mmを測る資料です。経文は表裏ともに7行が確認され、大毘盧遮那成仏神変加持经(大日经)の入曼荼罗具縁真言品第二之餘の部分に相当します。

3は、上下端と1側面を遺存した、幅13.2cm、長さ21.9cmを測る、本来の上下の長さの確認できる焼成の良好な須恵質の灰褐色を呈する、厚さ13.5mmの資料です。上下の長さは21.9cmに対して横幅の復元幅は27.5cmとなります。表裏に7行ずつ確認できる経文は、蘇悉地羯罗经の分别烧香品第十の部分に相当します。

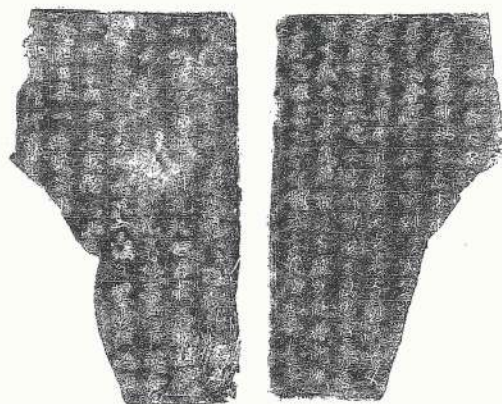
4は、下端全体と片方側面の大半、および反対側の側面が僅かに遺存する幅18.3cm、長さ16.1cmの大きさの資料です。灰褐色を呈する焼成の良好な須恵質の資料であり、厚さは8.5mmです。表裏と



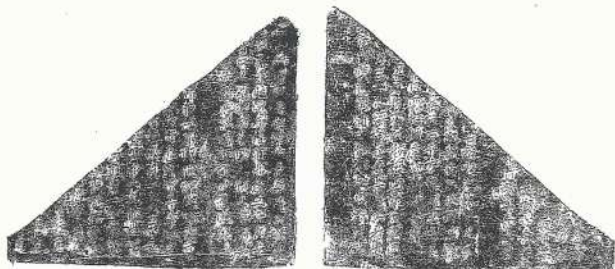
1



2



3



4

(39) 足立コレクション  
大日寺瓦経拓本

もに14行分確認できる経文は、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五の部分に相当します。瓦経の大きさは、本来ほぼ18cmの正方形を呈したものと考えられます。

このほかの図示していない瓦経片は14点数の内訳は妙法蓮華經片10点、蘇悉地羯羅經片

3点、大毘盧遮那成仏神變加持經(大日經)1点となります。これらの瓦経片の小口部分には、「四之五」、「之第二番」と書写した經典の番号を記した丁符、「行尊」、「藤原経実」と經典を書写した人物名を確認できます。

### 伝・大和橘寺出土瓦経(立正大学博物館所蔵)

大和・橘寺出土と伝えられる1点の一仏一字瓦経片です。

この瓦経片は、側面および底辺の一部を遺存したものです。大きさは横41mm、縦54mmで、厚さ14mmを測る、焼成の良好な淡黒褐色を呈する資料です。

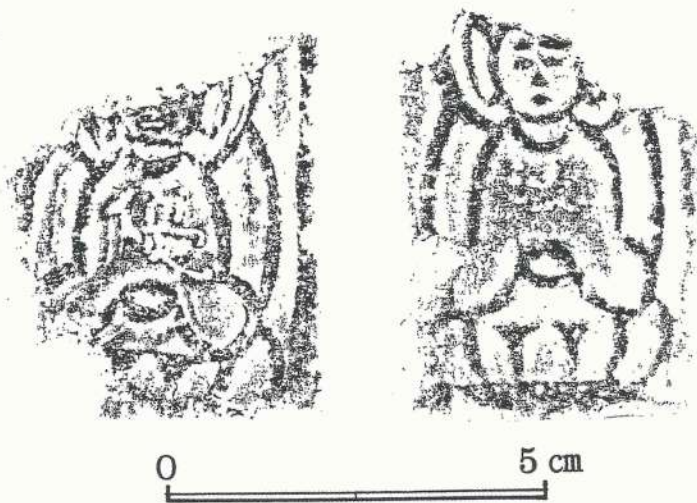
表裏両面には陽出の線によって蓮華座に坐した光背を有する仏像が表わされており、仏像の身体の中央に経文1字を刻んでいます。

仏坐像は定印を結んだ如来形で、頭光と身光の二重の光背を有しています。仏像身体中に刻まれた経文は、「法」と「優」です。

この一仏一字瓦経片と酷似する資料は、兵庫県朝来市の楽音寺から出土しています。18cm四

方の粘土板に5列3段にわたる15体の仏像を、表裏に表わしており、仏像の身体の中央には経文を1字ずつ刻んでいます。類似した資料は、京都府福知山市の道勘山古墳からも出土しています。

これらの一仏一字瓦経は、他の泥塔が型に粘土を入れて成形するのとは異なって、多数の仏坐像を彫刻した型を粘土板に押圧して製作したものであり、それぞれに1字の経文を刻んで仕上げられています。比較資料は少ないものですが、立正大学博物館所蔵資料と楽音寺出土品は微細な点まで一致しており、同じ型を使用して製作されたものと思われます。



(38) 伝・大和橘寺瓦経

## 挿図出典一覧

- (1)・池上 悟 1996  
(3)～(5)・矢追隆家 1932  
(11)・池上 悟 2009  
(12)～(15)・池上 悟 2012  
(16)・倉吉博物館 1993  
(17)・大和町教育委員会 1994 をもとに作図  
(24)・(25)・姫路市教育委員会 1999  
(28)・(33)・村木二郎 2002  
(34)・(37)・(39)・池上 悟 2010  
(40)・時枝 務 1996

その他の挿図は、本図録作製にあたって作図したものです。

## 【参考文献】

- 石田茂作 1927 「土塔に就いて」『考古学雑誌』第17巻第6号 考古学会  
矢追隆家 1932 「宮古及東大福寺より出土せる泥塔に就て」『銅鐸』創刊号  
日野一郎 1938 「我が國に於ける小塔供養の推移」『史観』第17冊  
石田茂作 1958 「瓦経の研究」『瀬戸内考古學』第2巻第1号 瀬戸内考古学会  
鎌木義昌編 1963 『安養寺瓦経の研究』  
石村喜英 1974 「瓦塔と泥塔」『新版考古学講座 8〈上〉』雄山閣  
網干善教 1979 「伯耆大日寺出土の瓦経について」『関西大学文学部論叢』第28巻第3号  
八尋和泉 1982 「筑前飯盛山瓦経（前編）」『研究論集8』九州歴史資料館  
網干善教 1983 「平安朝後期瓦経片の復元的研究」『南都仏教』第50号  
木下密運 1984 「小塔」『新版仏教考古学講座』第3巻 雄山閣  
三宅敏之 1984 「経塚の遺物」『新版仏教考古学講座』第6巻 雄山閣  
池上 悟 1989 「伯耆赤碓塔考」『立正史学』第66号  
間壁忠彦 1993 「美作間山瓦経」『古文化談叢』第30集  
倉吉博物館 1993 『経塚の遺物～こめられた願い～』  
伊藤久嗣 1993 「泥塔」小考『齋宮歴史博物館 研究紀要2』齋宮歴史博物館  
大和町教育委員会 1994 『肥前築山瓦経塚』  
池上 悟 1996 「海の彼方の泥塔」『標葉文化論究』  
時枝 務 1996 「伊勢・小町塚出土光背の施文技法」『考古学の諸相』  
安藤孝一 1997 「播磨極楽寺瓦経塚の研究」『東京国立博物館紀要』第32号  
姫路市教育委員会 1999 『播磨極楽寺瓦経—特別史跡姫路城跡内堀出土—』  
池上 悟 1999 「伯耆赤崎出土の泥塔経」『考古学論究』第6号 立正大学考古学会  
時枝 務 1999 「瓦経に描かれた曼荼羅～大日寺経塚出土例を中心に～」『瓦衣千年』  
宮小路賀宏 2001 「筥崎宮出土瓦経」『研究論集26』九州歴史資料館  
村木二郎 2002 「作善業としての瓦経」『国立歴史民俗博物館研究報告』第93号  
國學院大學考古学資料館 2009 『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅲ』  
池上 悟 2009 「伯耆における中世石塔」『文学部論叢』第130号  
池上 悟 2010 「伯耆大日寺瓦経」『立正大学人文科学研究年報』第47号  
池上 悟 2012 「伯耆の仏教遺物」『立正大学人文科学研究年報』第49号  
吉川 聡 2013 「大日寺瓦経の研究」『文化財の新地平』奈良文化財研究所



40



### 第8回特別展 「泥塔と瓦経」

編集・発行 立正大学博物館

発行日 平成 25 年 11 月 18 日

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL048-536-6150/FAX048-536-6170

E-mail:museum@ris.ac.jp

URL:<http://www.ris.ac.jp/museum/>



### 正誤表

図録の下記の箇所にも誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

| ページ             | 誤                         | 正                       |
|-----------------|---------------------------|-------------------------|
| 1 1段・9行目        | 偈文印した                     | 偈文を印した                  |
| 5 2段・10行目       | 東福寺遺跡                     | 東大福寺遺跡                  |
| 5 2段・15行目       | 東福寺遺跡                     | 東大福寺遺跡                  |
| 6 1段・4行目        | 批定地                       | 比定地                     |
| 6 2段・6行目        | 50～7mm                    | 50～70mm                 |
| 7 1段・5行目        | 相輪の大藩                     | 相輪の大半                   |
| 7 1段・7行目        | 欠損下幅                      | 欠損した幅                   |
| 7 1段・8行目        | 塔形泥塔                      | 宝塔形泥塔                   |
| 7 1段・17行目       | 欠損下幅                      | 欠損した幅                   |
| 7 2段・17行目       | 瓦経                        | 泥塔                      |
| 7 図9 キャプション     | 伯耆竹内経塚出土塔                 | 伯耆竹内経塚出土泥塔              |
| 11 1段・1行目       | 奈良県東福寺遺跡                  | 奈良県東大福寺遺跡               |
| 12 1段・20行目      | 和・金峯山経塚                   | 大和・金峯山経塚                |
| 13 1段・8行目       | 埋納納                       | 埋納                      |
| 17 1段・3行目       | 560箇所                     | 56箇所                    |
| 17 1段・5行目       | 天養元(144)年                 | 天養元(1144)年              |
| 18 23行目         | 天養元(1114)年                | 天養元(1144)年              |
| 28 1段・5行目       | 瓦経片は                      | 瓦経片の                    |
| 28 図38 キャプション   | 伝・大和橘寺瓦経                  | 伝・大和橘寺出土瓦経              |
| 28 (大和橘寺) 2段6行目 | 他の泥塔が型に粘土を入れて成形するのとは異なって、 | 他の瓦経が粘土板に経文を刻んだものとは異なって |
|                 |                           |                         |